

「新時代に応える医師の養成と地域医療への奉仕」を建学の精神に一九七二年開学の長久手市岩作雁又・愛知医科大学（三宅養三理事長、佐藤啓二学長）は現在、医学部、看護学部の二学部、二大学院研究科体制で二〇一四年五月に新病院も開院し数々の最先端医療も提供している。「社会から評価され、選ばれる医大」を基本方針に教育・研究・診療の領域で更なる飛躍へと改革に取り組んでいる三宅理事長に話を聞いた。

——理事長就任七年。これまでの取り組み、成果は？

三宅 理事長は任期三年なので三期目に入りましたが、就任した二〇一〇年一月は大学は厳しい状況でした。収支は赤字で、リーマンショック後の時期で建設予定の新病院は無期限停止の状態でした。

所信表明で「このままでは存続不可能、新病院は可及的速やかに建設を開始する他に方法はない」とまで言いました。選択肢がこの一つしかなかったことは、運が良かった”と思っています。

経営改善のスタートとして、愛知県で総務部長を経験された島田孝一氏に法人本部長になっていただき、あらゆる角度から検討し新病院を建てる決断をしました。私は今が底値だと感じ、どれだ

めには建設業者の鹿島と二一億円で契約。

その直後に東日本大震災が発生しました。材料費、人件費、建築費は大高騰した震災後だったらとてもその額に収まりません。最近、鹿島に試算してもらったところ、



三宅 養三（みやけ ようぞう）
昭和17年愛知県生まれ。73歳。同42年名古屋大学医学部卒業。同43年名古屋大学眼科入局。平成9年名古屋大学医学部教授。同17年名古屋大学名誉教授。東京医療センター・臨床研究センター所長、愛知淑徳大学医療福祉学部教授、愛知淑徳大学クリニック院長などを歴任し、同21年学校法人愛知医科大学副理事長。同22年より現職。

け借金してでも建設する時期だと思いました。法人本部長を中心に資金繰りにも駆けずり回り、厚労省の福祉医療機構からは一八〇億円余の融資を受けました。

そして十月には教授会を口説いて新病院建設を了承していただきました。さらに翌一年の三月初

もし同じ条件で昨年建設していたら、なんと四三〇億円という数字でした。

さらにリーマンショックで多額の損失が出たのですが、他の大学のように損切りせず、「資金運用委員会」を立ち上げ「処分せず待て」ということになり我慢。五年

後には損失は完全になくなり、黒字になりました。

事務方では整理、職員には我慢など苦労があったと思いますが、実績が上ががり、V字回復し一四年五月には新病院も開院しました。

今の医大は研究、臨床、教育についても理事長が経営状態を鑑みた一定の方向性を指示しないとやっていけない時代となりました。そのためにはこれらの経験も必要とされ、人脈も重要になってきます。

新病院が開院し、舞台はできました。満足な施設がないと人は来ません。次は役者をそろえる。今、良い人材の発掘と獲得を進めています。

——自分分野の構築、特色ある大学づくりを唱えています。

三宅 今は大学の存亡が問われる厳しい時代です。国は大学を整理しようとしており、国立大学では二、三の大学をまとめて一大学に統合する方向に向かいつつあります。私立医大では柔軟性はありますが、大学の機能を果たさないと存続が難しいのです。「財の独